

世界会議 9月18日

■ 基調講演

クラウディア・サドフ国際水管理研究所所長
大垣眞一郎水道技術研究センター理事長・元IWA副会長

■ 各セッション・ワークショップ

JICA SDGsワークショップ 「残り12年」SDG6目標達成に向けた課題は？
WHO気候変動ワークショップ 水の安全計画に仙台、横浜の実例を紹介
テクニカルセッション スマートメータ・東京の発信に注目

■ カルチャーイブニング

水魚の交わり 東京の“おもてなし”

■ 関連イベント等

サイドイベント 水業界の魅力を学生へ
世界への貢献に栄誉 奥野氏にIWA汚泥管理グループ功績賞
日水協 海外7協会とMOU
3セクサミット



基調講演

クラウディア・サドフ国際水管理研究所所長 SDG6は未だ軌道に乗らず 実務者も“市民”として行動を

3日目の幕開けを飾ったのは、国際水管理研究所 (IWMI) のクラウディア・サドフ所長による基調講演。「SDG6の現状と展望」をテーマに、MDGsとの相違点や達成に向けた課題認識を述べつつ、SDG6で掲げた「野心的な」目標を達成するためには、すべての国における水の実務家が野心的に行動することが求められていると呼びかけた。基調講演後のパネルディスカッションには台湾、米国、オーストラリアなどのパネリストがSDG6達成に向けた課題認識、各国・地域における対策について活発な議論を交わした。

IWMIは、農業農村開発の研究開発を国際レベルで行っている国際農業研究協議グループ (CGIAR) の傘下研究機関の一つ。本部はスリランカのコロンボ。主に地球の水資源の有効利用に関する研究を担っている。

サドフ所長は、「SDG6の達成に向けた取組みはまだ軌道に乗っていない」との現状認識を示した。この現状を踏まえ「野心的な目標には野心的な行動が必要だ」と述べ、水を都市内に効率的に持ち込み、安

価に供給する前世紀型の水資源管理とは全く異なる、すべての都市が流域でつながっていることを念頭に置いた統合的水資源管理が求められていると訴えた。

またSDG6の達成が、持続可能な都市、貧困の解消、レジリエントな都市、海洋環境、生態系などの他のSDG達成のカギとなるとの認識を示し、水に関わる者には経済、エンジニアリング、管理の三つの観点から劇的な考え方の変革が求められていると強調した。

その上で「SDG6達成のためには、水の実務家が野心的に行動しなくてはいけない」と述べつつ、「われわれは技術者であり、科学者でもあるが、一人の市民でもある」と呼びかけ、SDG6の達成に向けた行動を訴えた。



大垣眞一郎 水道技術研究センター理事長・元IWA副会長 不確実性に満ちた時代 世界に学び、滞りない社会実装を



水道技術研究センター理事長で、元IWA副会長の大垣眞一郎氏が「不確実性に満ちた時代における意思決定のあり方」をテーマに基調講演を行った。複雑な変化への対応に

は、新たな科学技術の実装、水の専門家同士の対話と連携が不可欠であるとし、IWA東京世界会議・展示会がそうした場となることを強く希望した。

水を取り巻く不確実性としては、かねてから提唱している「構造的な変化」「予測できない不連続な変化」という二つの変化を説明。前者では人口動態や都市構造の変化を、後者では気候変動の影響や地震・津波等の災害を例に挙げた。

取り巻く状況は困難だが、国内外の水分野では「革新的な科学技術によって予測もつかないような発展

を果たし、社会全体に影響を与えてきた」と歴史を振り返った上で、あらためてイノベーションの重要性に言及。これから不確実な時代の中でSDGsを達成し、水を持続可能なものとするには「アンテナを高く張り、日々発見される新たな科学技術の情報を把握する必要がある。また、水関係の科学技術を開発し、実装して、私たちの水の未来のために活用し

ていかななくてはならない」と呼びかけた。

実現のポイントは、外の世界から事例を学び、新しい科学技術をじっくりと培い、それらを遅れることなく実装することだとした大垣氏。そのために不可欠な「水のプロフェッショナルによる対話と連携」に向けた仕掛けの一つが、今回の会議・展示会だと結んだ。

各セッション・ワークショップ

JICA SDGsワークショップ 「残り12年」SDG6目標達成に向けた課題は？

SDGsの目標達成年次まであと12年。世界規模、地域規模、国規模の各レベルからSDG6達成に向けて何ができるかを探るワークショップが開かれた。主催は国際協力機構（JICA）。ワークショップでは水に関する国際的な目標SDG6のうち、特に衛生と汚水管理に関連したサブターゲットSDG6.2、SDG6.3の達成に焦点を当てた議論が展開された。

SDG6の達成状況などを取りまとめている国連水関連機関調整委員会（UN-Water）とIWAが世界規模の視点で話題提供した。

UN-Waterでは昨年、SDG6の進捗を評価するための指標やその手法などを示した報告書を取りまとめており、プレゼンを行ったウィリアム・リーヘッド氏は、報告書で示した国連加盟各国のデータを、次の報告書を取りまとめる4年後に向けて深掘りしていくこと、国レベルでのデータの取りまとめを推

奨していくことを明かした。IWAのロバート・ボス氏は、SDG6の達成に向けて組織内にタスクフォースを設置したとしながら、目標達成への議論には若手の関与が必要不可欠だと呼びかけた。



▲モデレーターを務めた滝沢教授

ベトナム、タイ、マレーシアからは自国における汚水処理の現状やSDG6達成に向けたモニタリングを実施する上で直面している課題を解説したほか、東京都下水道局の北村清明氏が東京都の下水道整備の歴史を紹介。また国土交通省、環境省からはAWaPなどの汚水処理の知見をアジア地域レベルで共有し、SDG6の達成に向けた情報などを集積するプラットフォームの活動が紹介されたほか、国際的なNGO団体WaterAid India、JICAからもSDG6の達成に向けた知見が披露された。

滝沢智東京大学大学院教授がモデレーターを務めたパネルディスカッションでは、これまでの議論を踏まえ、SDG6.2、SDG6.3の達成に向けた取組みの方向性が提起された。

テクノロジーについては、途上国が使うことも考



慮した技術開発、また指標化を図る上で技術の標準化の必要性が示唆されたほか、地域の実状に応じたシステムを採用することの重要性に言及した意見もあった。

会場との質疑応答では、SDGsの目標年次まで残

り12年となる中、目標達成の実現可能性を問う声もあり、タイのパネリストが「12年でのSDG6達成は難しい。しかし重要な点はどのような進捗状況にあるのか分析することだ」と応じる一幕もあった。

WHO気候変動ワークショップ 水安全計画に仙台、横浜の実例を紹介

世界保健機関（WHO）主導のワークショップ「気候変動に対応し得る水の安全保障計画」では、気候変動がもたらす災害リスクを水道事業者の水安全計画に盛り込む必要性と、その難しさについて各国間で議論がなされた。

水道事業への影響としては、将来の洪水、渇水、水質悪化などが懸念されている。ワークショップでは、WHOが「水道事業のレジリエンスをより高めるため、これら将来のリスクを水安全計画の中に位置付けるべき」との考えを示した。各国からは気候変動への対応のほか、洪水や干ばつの影響を簡単に予測できるWebベースのツールなども紹介された。

国立保健医療科学院の島崎大氏は仙台市、横浜市と協力して行ったシミュレーションの結果を説明した。

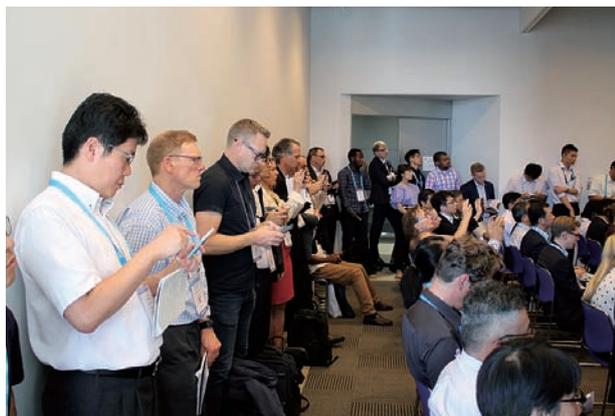
影響予測ツールはほぼ構築されたが、シナリオや



モデルの選択で結果には大きな差が生じる上、使い勝手の問題もある。実計画への導入に向けては、事業者にとっての使用のハードルを下げる工夫が求められる。

テクニカルセッション スマートメータ・東京の発信に注目

テクニカルセッション「センサーとスマートソリューション」では、東京都水道局が「日本初の大



規模なスマートメータモデルプロジェクトの取り組み」「東京都へのスマートメータの適用性の検討」について発表した。

同局がスマートメータによる自動検針、水道使用量の見える化サービス、見守りサービスの実現に向け中央区晴海五丁目地区をモデルとして進める取り組み概要を紹介したほか、フィールドでの通信方式検討状況などを説明した。17日の基調講演で小池百合子都知事が「スマートウォーターシステム」の構築に向けたプロジェクトの立ち上げを表明したこともあり、セッションは注目を集め、立ち見が出る盛況となった。

カルチャーイブニング

水魚の交わり 東京の“おもてなし” 水が創造した東京の都市力 文化と食の融合で魅せる

IWA世界会議の海外からの参加者を“おもてなし”するイベント「カルチャーイブニング-Tokyo Garden Night-」が18日夜、都立清澄庭園で行われた。屋外会場は雨に見舞われ、庭園内の大正記念館を中心に行われたが、さまざまなアトラクションが雨の合間に行われた。

会場では東京の水道水を仕込み水として使った日本酒とともに、東京の水環境改善の象徴とも言える鮎の塩焼きなど東京の水にゆかりのある食事が振る舞われ、参加者は東京の魅力を満喫した。東京都では東京2020大会に向けて都が有する施設をユニークベニューとして活用した取組みを推進しており、清澄庭園を使ったイベントは今回が初めてとなる。

小池百合子都知事はあいさつで、雨模様になぞらえ「水の会議」との縁に触れて会場を盛り上げ「今夜は東京都が管理する由緒ある日本庭園を会場とした。伝統工芸品や料理をはじめ、東京の水道水で醸造した日本酒、下水道の整備により水質が回復した多摩川の鮎も用意した。素敵な時間を過ごして、明日への英気を養っていただければ」と、参加者に東京の魅力を堪能してもらえるよう望んだ。

小池都知事、ダイアン・ダラスIWA会長、古米弘明東京会議議長らによる鏡開きで会がスタートし、参加者は折り返しを迎えた会議の合間のひと時を楽しんだ。



関連イベント等

サイドイベント 水業界の魅力を学生へ 86人の学生が世界の水を体感

開催国委員会が主催する学生向けサイドイベント「大学生・大学院生必見！水業界研究セミナー」がTFTホール500で開かれ、水業界に関心を持つ大学生・大学院生86人が参加した。水ビジネスの概要と今後の展望についてのセミナーや業種ごとの主な事業内容などに関するガイダンスのほか、関連企業による個別企業相談会が行われた。

セミナーとガイダンスでは、ともに日本総合研究所リサーチコンサルティング部門の段野孝一郎氏が登壇。段野氏は「水ビジネスには、公共事業としての上下水道を経営する事業体のほか、メーカーやコンサルタント、ゼネコンなど多種多様な業種の企業関わっており、業務内容も多岐にわたる。皆さんの強みを生かせる進路を見つけてもらえたら」と述べ、参加した学生たちを鼓舞した。

個別企業相談会には関連企業21社がブースを出展し、各ブースで15分間の相談会を5回ずつ行った。企業担当者による事業や製品の説明に対して学生は積極的に質問するなどし、水業界、水ビジネスへの理解を深めた。相談会終了後はIWA展示会を見学した。

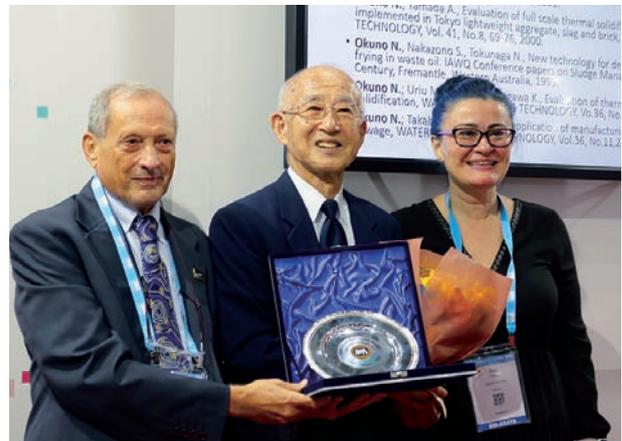


世界への貢献に栄誉 奥野氏にIWA汚泥管理グループ功績賞

IWAの汚泥管理グループの功績賞である「P. Aarne Vesilind Specialist Medal for Residuals Research」の表彰式が展示会場内のイベントスペースで行われ、滋賀県立大学名誉教授の奥野長晴氏が栄誉に浴した。

奥野氏が過去にIWAで発表した日本の下水汚泥再生利用に関する研究論文が、世界の汚泥処理問題の解決に寄与した点をはじめ、下水道分野の研究での先進性や研究成果による社会貢献性が認められ、今回の表彰につながった。

奥野氏は、京都大学工学部土木工学科出身。同大学大学院工学研究科土木工学専攻修士課程を経て、1960年から30年以上にわたり東京都下水道局に奉職。この間、米国ノースカロライナ大学大学院公衆衛生院への留学を経験し、京都大学で工学博士を取



得した。1995年に滋賀県立大学環境科学部教授に着任し現在に至る。IWA理事職を約10年間勤め上げ、さまざまな国際的なフィールドで活躍した水分野のスペシャリスト。

日水協 海外7協会とMOU

世界会議に合わせて世界各国の水道協会による連携会議が開かれ、日本水道協会、アメリカ水道協会、台湾水道協会、インド水道協会、韓国上下水道協会、マレーシア水道協会、タイ水道協会、オーストラリア水サービス協会、フィリピン水道協会が今後の連携強化に向けたMOUを締結した。

協定では、2年に1度のIWAアジア・太平洋地域会議（IWA-ASPIRE）の開催時に各国水道協会が直接情報交換する場を設け、可能な限り参加することなどを定めた。



3セクサミット

水道の転換点 地域に根ざす“3セク”が持続の担い手に

世界会議に合わせて、全国水道事業者の第3セクター22団体が一堂に会し、「水道3セクサミット」が初めて開催された。各団体のショートプレゼンテーションに続き、活発な意見交換を行い、サミット開催を通じた今後の団体間のネットワーク強化を図った。

各団体からは法人形態、出資構成、業務内容、従業員内におけるプロパー・事業者OBの割合など、業務形態を具体的に紹介。また一部では近隣事業者への支援、海外展開といった近年の新事業についても説明されたほか、随意契約の見直しなどが進められる中での今後の業務拡大について、人材の確保・



育成や技術継承についてなどの課題認識にも言及された。